

クラクフ 苦楽府への想い

ポーランド共和国の南部にクラクフという古都がある。1596年に首都がワルシャワに移る前は、この街がポーランド王国の都であった。この街は1978年にユネスコの世界遺産に登録され、街中に中世の美しい建造物群やカトリックの古い教会が多数残っている。クラクフはドイツ軍の司令部が置かれたため戦禍を免れたのである。

その古都にポーランド科学アカデミーの一部門の動物系統分類学研究所がある。1979年、事実上ソ連の覇権下にあったその研究所に、私は文部省(当時)から1年間の国費在外研究員として派遣された。私は、以前から論文の交換をしてきた旧知の研究仲間がいることもあり、コペルニクスやショパンの祖国で、文化の香り高いポーランドでの研究を申請し、認められた。キュリー夫人を敬愛している妻もポーランドならば一緒に行きたいと願ったため、小学校1年生と4年生の二人の娘を伴っての海外生活となった。勿論、家族の渡航費と生活費は自己負担だった。

娘たちは言葉も解らないまま、現地の小学校に「留学」を許可された。妻は独学していたロシア語が支配国の言語として忌避され、一方、私は加害国としてのドイツ語が忌避されて、当初は言葉の壁に苦労した。幸い、英語を解する友人たちに助けられながら、少しずつ現地の暮らしに溶け込むようになった。やがていち早く妻が買い物や子どもの学校との対応に慣れていったし、心配していた子どもたちの言葉の上達も著しく、3カ月を経た頃には私の買い物の際の介添えをしてくれるまでになった。研究所の人たちとは殆んど英語で意思疎通ができたので、私のポーランド語の進展が最も遅かった。

ポーランドの人たちには日本に興味を持つ人が多く、また人柄も控えめな人が多かったので、妻には何人かの親友ができたし、娘たちにも住んでいた集合住宅の近くに友人ができ、その子の家に自分たちだけで遊びに行くようになった。クラクフのスーパーの棚はほとんどいつも空だったけれど、友人たちがあちこちの商店の品揃え情報を提供してくれたので、肉も買えたし、時には長い行列に並べば、バナナやミカンなどの果物も手に入れることができた。

滞在中の1980年、バルト海に面した港町グダンスクの造船所でワレサ率いる自主管理労組「連帯」が誕生した際に、時のギェレク政権は弾圧を強めた。ワルシャワの日本大使館からは、有事の際の日本人会への連絡ネットワークの書面を受け取った。色々と緊張する場面もあったが、今思うと得難い体

田村 浩志



験となっている。

わたしたちが帰国した翌年、時のヤルゼルスキ政権はソ連を付度して戒厳令を布告し、ポーランドの街中に戦車が行き来する物々しい状態となった。しかし、それが逆効果となり、カトリック教徒が人口の90%以上の国民たちは教会を後ろ盾にして抵抗したため、1983年7月に戒厳令は撤廃され、1989年には政権が崩壊し、事実上の無血革命により自由主義の国家になった。過去に何度も近隣の国々に攻め込まれ蹂躪されて、地図から自国の名が消えても、いつか必ず取り戻したポーランドの人々の国を愛する不撓不屈の気概を私は尊敬している。

苦もあり、楽もあったポーランドでの生活は今も私たち家族の共通の話題源となっている。私たちの生活は「苦楽府」から始まったと言っても過言ではない。キュリー夫人は勿論のこと、すっかりポーランドとそこの人々に惚れ込んだ妻は帰国後、本格的にポーランド語を学び、翻訳者としての道を独自に切り開いた。娘たちはそれぞれアラフィフになったが、実家に戻ると、かつてのポーランド滞在が話題になることも多い。(たむら・ひろし、茨城大学名誉教授、岩手県在住、奥様は翻訳家田村和子さん)

千歳高校放送局テレビ番組『ロウ管は語る』

私たち千歳高校放送局は、ブロニスワフ・ピウスツキを取り上げた5分のテレビ番組『ロウ管は語る』を制作しました。番組のテーマは「言語を残すことの大切さ」です。ピウスツキが残したロウ管音声の貴重さやアイヌ語研究への貢献を知り、言語・文化を残すことの大切さを伝える番組を制作したいと思いました。

番組は「高文連放送コンテスト」に提出し石狩地区大会で2位、全道大会では3位でしたが、後一步で全国大会へは届きませんでした。ご期待に応えることができずとても悔しい気持ちでいっぱいです。取材にご協力くださったたり、講演会で声をかけてくださったたり、ピウスツキの勉強会を開いてくださったたり、本当に沢山の方々に支えていただきました。取材を通して私自身も大きく成長することができたと感じています。ここまでこれたのも皆様の応援のおかげです。一年間沢山のご協力本当にありがとうございました。(加賀谷彩心)

